

## 審査の結果の要旨

氏名 川添善行

本論文は、祭祀空間としての墓地空間に着目し、体系的な調査・分析を行っている。これまで墓地に関する研究は、社会学や民俗学などの分野では行われているが、工学的な手法をもとに、その空間としての側面を体系的に行ったものはこれまでない。

本論文では、埋め墓と詣り墓を分離する両墓制に着目し、基礎データとして各地の両墓制集落の実地調査を行い、図面化を行っている。両墓制は、近代以前には日本中に多く存在していたと考えられているが、現在では都市化・火葬化の中で急速にその姿を消しつつある。我が国では失われつつある習俗であり、資料的な価値も高い。

序論では、研究の背景、概説、分析手法の整理などが述べられている。

第Ⅰ部では、現存する両墓制集落での実地調査と地図化、村落空間の領域構成に関して分析を行っている。民俗学の知見を参考に、現存する限られた両墓制集落を特定し、実地の調査を行っている。福井県若狭地方、三重県志摩地方、瀬戸内塩飽諸島から全 22 箇所の両墓制集落を対象とした実地調査にもとづき、集落空間のモデル化を行い、集落内における両墓の立地に関する類型化から、仮説を導き出している。

第Ⅱ部では、近代以後の墓地概念の変遷とその背景を考察している。墓地をイエ制度の核と定めた明治民法の起草委員である穂積陳重の墓地観と、同時期の民俗学者である柳田國男の墓地観を比較している。この中で、墓葬に関する制度と習俗の矛盾や対立を論じ、その上でこの相克の中で移り変わってきた両墓制を取り巻く背景について考察している。

第Ⅲ部では、具体的なケーススタディをもとに、墓地と都市の関係について考察を試みている。また、個人・家・共同体に対して墓地がどのような役割を

果たしてゆくかについて考察がなされている。

近代以降、多くの建築家や都市計画家がユートピア的な都市像を描いてきた。しかし、いずれもその中に墓地に対するビジョンを提示したものはない。都市は一時居留地であり、生と死を購う場、人間の存在全体や尊厳を保証する場とは考えなかったからである。こうした考えに立脚した近代の都市計画は限界を露呈し、社会構造の変化の中で修正を余儀なくされつつある。人口減少と高齢化社会へと向う我が国に於いては、近代的でありながらわれわれの習俗に馴染むような新たな都市像が求められている。本論文が葬送祭祀に着目し、さらには我が国独自の両墓制に論の基軸を置いたのも、こうした背景がある。

本論文は墓地のもつ意味を空間的分析と歴史的変遷の中で解明しようとした。着想の持つ独創性、実地における膨大な調査、その分析と体系化などの総体から、本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格を認められる。